

NIKKEI The STYLE——「飛ばす」を超える醍醐味。

2019/07/21 日本経済新聞 朝刊 11ページ 1659文字

「この辺りにあるのが100年ぐらい前のヒッコリーのクラブです」。岐阜市の会社社長、国江仙嗣さん（54）が広いガレージの一角を案内してくれた。

壁にずらりと立てかけられていたのは1800年代後半～1920年代に作られた木製シャフトのクラブで、優に100本を超える。どれもきちんと磨かれ、光沢あるダークブラウンが渋みを増していた。国江さんは30代から全米各地のコレクター宅やオークション会場を訪れて収集してきた。

「職人が一つ一つ作った物。誰が使ったクラブなのか、想像するだけで夢がある」と国江さん。今も集め続け、状態の良いクラブは実際のプレーにも持ち出す。近い将来にミュージアムをつくる構想も抱くほどの入れ込みようだ。

近代ゴルフは用具の進化とともに歩んできた。16世紀初頭にはスコットランド国王が硬くてしなる木を使う弓の職人からクラブを購入した記録が残るが、作り手も鍛冶屋らへと変遷していく。シャフトは1820年ごろから使われたヒッコリーが、1924年に米国、29年に英国のゴルフ協会などが認めたスチールに取って代わられた。ヒットしやすくなるよう大型化や低重心化がされ、形状やカーボン、チタンといった素材の工夫も重ねられている。

毎年のように「飛ばす」「曲がらない」というクラブが出てくる状況に、プロゴルファーの沼沢聖一さん（73）は「道具でゴルフをやっているようなもの。飛ばし屋が有利なパワーゴルフも迫力があっていいが、プロについては規制された道具で飛距離以上に大切なテクニックやコースの攻め方といった醍醐味を伝えることに立ち戻るべき」と話す。

近代ゴルフは英国スコットランド東海岸の海と農場の間の「リンクス」と呼ばれる砂地に芝の生えたコースから始まり、日本でも自然の地形を生かしたコースが生まれた。だが、飛距離の伸びたクラブに合わせるように、コースの改修が世界中で続く。2017年には茨城県で海外メジャーをしのぐ全長8000ヤード超のコースも登場した。

一方、ヒッコリーの時代の飛距離で設計された由緒あるゴルフ場は国内にも残り、かつての設計者の意図や魅力を堪能できるのもヒッコリーゴルフの楽しみだ。1903年、英国人貿易商が造った日本最古のゴルフ場、神戸ゴルフ倶楽部（神戸市）は全長約4000ヤードのごぢんまりとしたコース。標高約800メートルで、きついアップダウンや自然に近いフェアウエーが続く。

電動カートはなく、クラブは10本までに制限されるコースについて、自らもヒッコリーゴルフをたしなむ支配人の池戸秀行さん（70）は「歴史、距離ともヒッコリーにぴったり。ゴルフの違った楽しみ方を知ってもらえるのではないかと期待する。全国大会「ジャパンヒッコリーオープン」の会場にもなり、約500人の会員からもヒッコリーを手取る人が出てきている。

当時の規格でクラブを作る工房は今、スコットランドと米国に2カ所残るといふ。スコットランド人のアレックス・ブルースさん（57）は専門店を東京と軽井沢に持ち、イベントを催し、古いクラブのレンタルもしている。「いい仲間と会えることが一番の魅力」として、日本のヒッコリーゴルフの愛好家団体の設立準備も進めている。

ヒッコリー時代といえば、「球聖」と称されたボビー・ジョーンズを思い起こす人も多いだろう。アマチュアながら30年に当時のメジャー大会で唯一の「年間グランドスラム」を達成し、直後に28歳で引退した名ゴルファーだ。29年に彼が著した「Bobby Jones on Golf」では、スチールシャフトの発展に「もっと声援を送ってしかるべき」としながらも、自らはヒッコリーシャフトにこだわり、その時代とともに競技人生に幕を下ろした。

取材の締めくくりに、都内のゴルフ練習場でヒッコリーのクラブを握ってみた。もちろんボビー・ジョーンズのような軽やかで優雅なスイングは再現できなかったが、柔らかな感触と武骨な音とともに、ゴルフの長い歴史と神髄を考えさせられた。

小沢一郎

井上昭義撮影

許諾番号30081433 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。
本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。
本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。
Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.